

## 高校生のための《本格ミステリ入門（日本編）》

執筆 大村 拓

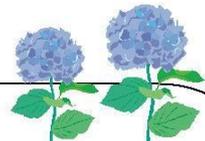
### 第1回「戦後探偵小説ブームの到来」

#### ～本格探偵小説の鬼 横溝正史～

横溝正史（よこみぞ せいし 1902-1981）

それではこれより、《高校生のための本格ミステリ入門（日本編）》の講義を始めたいと思う。本稿は昨年度の《本格ミステリ入門（海外編）》で得られた知識を土台として論を進めていくので、できる限り「海外編」を読んだ上で本稿を読んでいただくことを、お勧めしたい。

第1回にあたる今回は、わが国において初めて英米の黄金期本格に匹敵しうる本格ミステリを書いた横溝正史をとりあげてみたい。一般に横溝が戦後直後の1946年（昭和21年）に発表した『本陣殺人事件』をその第一号と見るのが定説だが、それ以前にわが国に本格ミステリは存在しなかったかと問われると、そうとは言えない。そこでまず横溝を解説する前に、戦前の本格ミステリの状況を「ミニ特集」として概説しておこう。



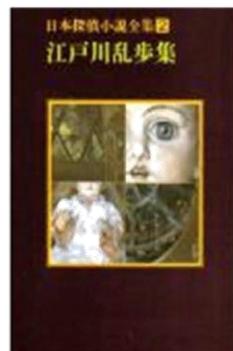
#### ◎ミニ特集 戦前日本の本格ミステリ

国産探偵小説（戦前では「ミステリ」は「探偵小説」とよばれるのが一般的であった）の第一号といえ、遠く明治期までさかのぼることができるが、国産の本格ミステリに限定すれば、大正期に江戸川乱歩の書いた暗号解読物の短編○「二銭銅貨」（◎『江戸川乱歩短篇集』所収 ★913ヨ 岩波書店）が第一号ということになる。乱歩は、創作（『怪人二十面相』『少年探偵団』などの少年物を含む）・評論・海外ミステリの紹介・推理文壇の育成から新人の発掘にいたるまで、わが国のミステリ界の発展に最大級の貢献をした巨人であるが、本格ミステリの創作は得意とはしなかった。実際乱歩の本格物といえば、処女作の「二銭銅貨」の他には名探偵・明智小五郎のデビュー作である○「D坂の殺人事件」、倒叙物の秀作○「心理試験」（すべて短編）くらいしか見るべきものがない。一方乱歩の代表作といわれる○「屋根裏の散歩者」、○「人間椅子」、○「鏡地獄」、○「押絵と旅する男」（以上◎『江戸川乱歩短篇集』所収）、○「パノラマ島奇談」（◎『日本探偵小説全集2』所収 ★913ニ2 東京創元社）などは、いずれも犯罪に関わる異常心理・倒錯趣味を特徴としたものである。これらは乱歩にしか書けない独自の世界をもった傑作ではあるが、論理的推理を主眼とした本格ミステリとは言い難い。ちなみに戦前では、このようなタイプの作品は「変格物」と名づけられて「本格物」と対比されて一

大ジャンルを確立しており、むしろこちらの方が戦前では主流であった。

短編においては大阪圭吉（代表作○「とむらい機関車」◎『日本探偵小説全集12』所収 ★913ニ12 東京創元社）などの本格を得意とする作家はいたが、長編における本格となると、見るべきものは少なく、海の向こうの英米では本格ミステリの黄金期が花開いていた状況を鑑みるに、いささか寂しい状況であったと言わざるをえない。それでも一応本格長編の代表作を挙げるとすると、ヴァン・ダインの影響を受けた浜尾四郎の○「殺人鬼」（◎『日本探偵小説全集5』所収 ★913ニ5 東京創元社）クロフツの影響を受けた蒼井雄の○「船富家の惨劇」（◎『日本探偵小説全集12』所収 ★913ニ12 東京創元社）、エラリー・クイーンばりに読者への挑戦状を挿入した木々高太郎の◎『人生の阿呆』（★913キ 東京創元社）あたりとなるが、いずれも本家の模倣の域を脱していない。また名作と名高い小栗虫太郎の◎『黒死館殺人事件』（★913オ1 社会思想社）は、一応本格のスタイルで書かれてはいるが、論理を超越した分類不能の異色作であり、本格物として評価するのは難しい。

以上のように戦前日本の探偵小説界は、本格ミステリという点からみると低調であったと言わざるをえず、戦後の横溝本格の登場を待つしかない状況だったのである。



【注】 1. ◎『』で表したものは、当時あるいは現在でも出版されている本の書名です。

○「」は、小説の題名です。

2. ★で表したものは、習志野高校図書館が所有している本です。NDC も表記します。

3. 小説の内容については、書体を違えています。

## 横溝本格の登場

わが国は1941年(昭和16年)より長く苦しい太平洋戦争(第二次世界大戦)に突入するが、この戦争こそが横溝が長編本格ミステリの傑作を次々と生み出していく母胎となった。その理由は次の3点にある。

### ① 戦時中は探偵小説の発行が禁止されていたこと

探偵小説は英米で生み出された文学ジャンルであるため、英米と戦っていたわが国ではこれらは「敵性文学」と見なされ、書くことが許されなくなっていた。戦前から探偵小説を書いてきた横溝にとっては、これは失業を意味し辛い状況であった。一方、わが国で探偵小説が自由に書けた時代は、雑誌連載が主たる発表媒体であったため、一般に作家たちは常に締め切りに追われて執筆をしていた。このような状況は、作品全体に首尾一貫した筋道を通し、

論理に矛盾のないようにまとめあげなければならない本格ミステリの創作にとっては、あまり好ましい状況ではなかった。優れた本格ミステリを生み出すには、やはりじっくりと構想を練り、細部まで細かい神経を使いながら書き進めていくだけの時間が必要なのである。戦前までは「変格物」が主流だったわけも、締め切りに追われる作家にとっては、着想だけで勝負のできるこちらの方が書きやすかったからに違いない。

しかし戦時中は、いくら書きたくても探偵小説は書かせてもらえないのだから、探偵小説家たちは開店休業状態となり、いやでも構想を練るだけの十分な時間が確保されたのである。横溝にとっても同様の状況であり、いつか再び探偵小説が書ける日が来ることを夢見て、構想を練っていたことであろう。この時間的余裕が戦後直後から、次々と本格長編の傑作を生み出していく原動力となったと言えよう。

## ②ディクソン・カーとの出会い

戦時中横溝は、友人からディクソン・カー（《本格ミステリ入門（海外編）》第4回参照）の原書を借りて読む機会があり、大いに感動したという。カーといえば不可能趣味に怪奇趣味をからませて抜群の語り口で物語を作り上げていくことを得意とする本格ミステリの大家であるが、横溝はこのスタイルこそが自らが手本とするべきものだと直感したらしい。怪奇趣味だけなら「変格物」が主流であった戦前でもおなじみのものであったが、これをカーのように知的な論理と融合させて書くという発想は誰にもなかった。横溝はカーを読んだ時、これこそが自分が目指すべき方向だと感じたのだろう。それはカーの語り口の巧さと同様の資質を自らに見出したからに他ならない。横溝が戦前に書いていた探偵小説は、緻密な論理に支えられた本格物ではなかったが、語り口の巧さにおいてはカーにひけをとらないほどの抜群のものがあつた。この共通点を発見したことこそが、戦後の作風を一新させる原点となったのである。

## ③岡山への疎開

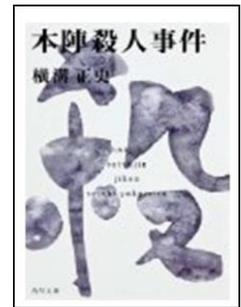
戦時中横溝は空襲を逃れて岡山の山村に疎開することとなったが、この経験が横溝ミステリに欠かせない舞台を用意することとなった。戦後の横溝ミステリでは、古い因習と封建的な人間関係にいろどられた農村が舞台となることが定番となっているが、横溝自身は実は神戸生まれで学校は大阪、編集者となってからも東京暮らしと、典型的な都会人なのである。彼が田舎に暮らしたのは、長野の諏訪で療養生活をした一時期を除いては、疎開時に岡山に暮らしたのが初めてであった。この田舎での暮らしは、都会人横溝にとっては、何かと刺激的なものであったようだが、同時にディクソン・カーが得意とするイギリスの伝奇趣味をわが国に取り入れるならこの農村の生活こそがふさわしいと、作家として直感したのだろう。カーが描くところの悪魔や降霊術といったキリスト教文化に根ざした習俗を、先祖の祟りやわらべ唄といった純和風のものに変換することで、横溝ミステリの必須要素が準備されたのだ。

以上のような戦時中を体験した横溝は、敗戦の玉音放送を、「これからは、探偵小説が書ける！」という高揚感とともに聞いたという。そして満を持して本格ミステリの傑作群を次々と発表していくのだ。

以下に横溝の代表作5作を挙げてみるが、これらはいずれも終戦後の昭和20年代に書かれたものなのである。

1. ◎『本陣殺人事件』（★913ヨ 角川書店）（1946年＝昭和21年）

**【内容】**江戸時代からの宿場本陣の旧家、一柳家。その当主の婚礼の夜、屋敷内にただならぬ悲鳴と、激しい琴の音が響き渡った。離れ座敷では夫婦が布団の上で血まみれになって惨殺されていた。庭の中央には血に染まった日本刀が突き刺さっており、周囲には足跡一つ残っていなかった。また、3本指の人間が犯人であると思わせる、手の血痕が残っていた。にもかかわらず、周りに降り積もった雪のために、離れは完璧な密室と化しており、そこには犯人の逃げた痕跡が一切なかったのだ！



本作は日本の本格ミステリが初めて世界標準となった記念碑的作品である。密室殺人や謎の三本指の男の存在が醸し出す怪奇趣味は、明らかにディクソン・カーの影響を強く感じさせている。しかしこれらの設定を表面的に扱うだけなら、戦前のミステリにもいくらでもあった。本作を世界標準としているのは、その謎解きの論理の確かさや伏線の巧みさといった本格ミステリとしてのテクニックが、従来の日本ミステリとは一線を画している点である。またその密室の建物にしても、外国ミステリをそのまま移植したかのような不似合な洋館などではなく、純和風建築である。舞台も岡山の旧家、さらには琴や日本刀といった和風の小道具で構成される謎は、海外作品の模倣ではなく、日本初の純本格ミステリを書こうという横溝の志の高さを伝えるものである。ただ残念なのは、通常の長編小説の半分程度という分量の少なさで、物語があっけなく終わってしまう点だ。これは終戦直後の物資不足の影響で、満足に紙を確保できなかったためである。横溝作品は分量を増やして書き込めば書き込むほど、天性の語り口の巧さが発揮されて面白くなる傾向がある。今の倍くらいの分量にしていれば、さらなる傑作になったに違いない。

そして本作でデビューするのが、名探偵金田一耕助である。この後のほとんどの横溝作品で活躍する金田一は、日本を代表する名探偵である。もじゃもじゃ頭に小柄な体格、よれよれの着物に袴姿という名探偵の外見は、決してカッコいいとは言い難い。その性格も、一見愛想が良く人なつっこい善人のようでいながら、実のところ飄々としてつかみどころがない。またその推理力も、「神の如き英知」とか「カミソリのような頭脳」といった名探偵におなじみの形容とは無縁で、どこか頼りなげで危なっかしい感じだ。しかしその探偵としての能力は、犯人に翻弄されているように見えながら、肝腎の点はだまされることなく見抜き、最後にはちゃんと解決してしまうのだから、やはり名探偵としか言いようがない。このように個性的な名探偵を創出したことで、横溝ミステリは一層輝きを増したのである。

ところで近年金田一耕助の孫と称する少年がコミックで活躍しているようだが、実際には金田一は結婚をしておらず、子孫がいるはずがない。あえて言えば、アメリカ放浪中に隠し子がいた可能性がなくもないのだが…。

2. ◎『蝶々殺人事件』（★913ヨ 角川書店）（1946年＝昭和21年）



**【内容】**人気歌手・原さくら主演のオペラ「蝶々夫人」が公演された。大当たりをとった東京公演の後、大阪へとその場を移す事となり、その間さくらは一足先に大阪に乗り込んだが、何故か宿泊先のホテルから失踪してしまう。いくら探し回っても見つからず、一座は主演を欠いたまま当日を迎える事となった。そしていよいよ公演直前、さくらはなんと死体となり、楽団員の荷物であるコントラバスのケースに詰められて到着したのである。一体、誰がこんなことを？ そしてこの荷物はどこから届いたのだろうか？警察は東京と大阪の間を渡ったケースの動きを追う事になるが…。

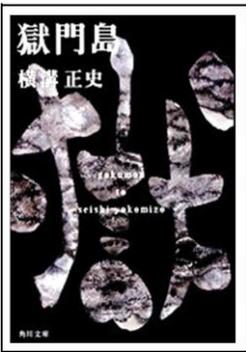
本作は、横溝が終戦直後に『本陣殺人事件』と同時並行で雑誌に連載した作品である。代表作を2作も同時に発表するとは、戦時中に行き場を失っていた著者の創作エネルギーが、いかに強

いものであったかがい知ることができよう。

本作には『本陣殺人事件』とは違って、ディクソン・カーの影響は見られず、死体をコントラスのケースに入れて移動させる謎の設定などに、クロフツの『樽』（《本格ミステリ入門（海外編）》第5回参照）の影響を感じさせる。また舞台は東京と大阪という大都会で、日本の農村社会を舞台とした戦後横溝作品の特徴はなく、むしろ戦前に得意とした都会型スリラーの雰囲気がある。しかし死体移動のトリックを始め、独創的なアリバイ・トリック、意外な犯人と本格ミステリとしての出来も群を抜いているのである。一部には本作の方が『本陣殺人事件』よりも上と評価する向きもあるくらいだ。

さて本作で活躍する名探偵は、戦前の横溝ミステリに数多く登場したシリーズ探偵の由利鱗太郎である。彼は元刑事の探偵で、新聞記者の三津木俊介とコンビを組んで数多くの事件を解決に導いてきた。しかしその特徴は若白髪であるという点くらいしかなく、個性や魅力においては、金田一耕助には大きくひけをとっている。そのため同時連載された『本陣殺人事件』でデビューした金田一が人気をさらっていくのと対照的に、影が薄くなった由利は戦後初登場となった本作以降出番を失い、これが最後の作品となってしまったのである。

### 3. ◎『獄門島』（★913ヨ 角川書店）（1948年＝昭和23年）

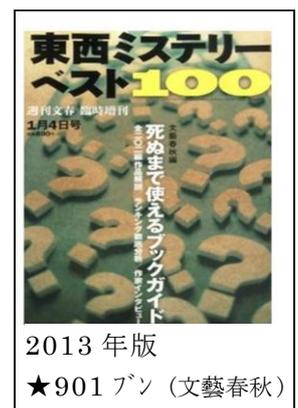


**〔内容〕** 獄門島。それは江戸時代を通じて流刑の地とされてきた、瀬戸内海に浮かぶ封建的な因習の残る小島であった。この島へ金田一耕助が渡ったのは、復員船の中で死んだ戦友・鬼頭千万太に「俺が生きて帰らなければ、3人の妹達が殺される…」との遺言を託されたためであった。島の漁師の元締めである鬼頭家は、本家と分家に分かれ対立しており、またその三姉妹は、美しいがどこか尋常でない雰囲気を醸し出していた。そしてその後、遺言通りに凄惨な連続殺人事件が発生する。それは島の寺に記されていた芭蕉の俳句に見立てたものであった！

週刊文春はこれまで2度（1985年と2012年）、すべての時代にわたるミステリのベスト100を選出する「東西ミステリーベスト100」という企画を行ったことがある。そしてわが国のそうそうたるミステリ・マニアたちが投票した結果、2度とも国内ミステリのベスト・ワンに選ばれたのが本作なのである。四半世紀の時を隔てて変わることなく1位に君臨し続けたことは大変な偉業で、まさに本作こそがこれまで日本語で書かれたすべてのミステリの中で、最も面白い本であると評価されたと考えて差し支えないだろう。



1986年版  
★901ブ（文藝春秋）

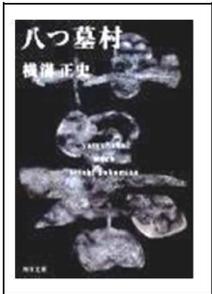


2013年版  
★901ブン（文藝春秋）

本作は戦後横溝が発表した金田一耕助物の第二弾で、紙事情もだいぶ落ち着いてきたのか、分量も通常の長編小説並に増えてきている。そのため、著者天性の語り口の巧さがさえわたり、『本陣殺人事件』で感じさせた物足りなさはもう見てとれない。舞台は瀬戸内海に浮かぶ獄門島という島で、典型的な日本の農村文化、因習的な精神風土の中で物語が進行していく。まさに横溝ワールド全開である。最初の死体は梅の木に逆さ吊りにされ、二度目の死体は釣り鐘の中に閉じ込められて発見される。これは俳句の字句通りに三姉妹が殺されていくという見立て殺人の趣向なのだが、殺人の恐怖と純和風の絵柄の美しさの同居が、絵画のような強烈な印象を読者の脳裏に刻み込む。さらに最後にさまざまな伏線が収束していく解決部は意外性と論理性にうち満ち

ており、ミステリの醍醐味を満喫できること間違いない。日本一どころか、世界のどこに出しても恥ずかしくない傑作である。

#### 4. ◎『八つ墓村』（★913ヨ 角川書店）（1951年＝昭和26年）



**〔内容〕** 戦国の頃、三千両の黄金を携えた8人の武者がこの村に落ちのびた。だが、欲に目の眩んだ村人たちは8人を惨殺。その後、不祥の怪異が相次ぎ、以来この村は「八つ墓村」と呼ばれるようになったという…。次いで大正×年、落人襲撃の首謀者田治見庄左衛門の子孫、要蔵が突然発狂、三十二人の村人を虐殺し、行方不明となる。そして二十数年、要蔵の息子の帰村をきっかけとして謎の連続殺人事件が再びこの村を襲った…。

舞台は岡山県の山中にある典型的な日本型農村の八つ墓村。ここでは村人による無差別大量殺人といういまわしい過去があり、それは惨殺された落ち武者の祟りだとされてきた。そして今また祟りのせいだと思われるような連続殺人劇の幕が切って落とされるのだ。

本作は横溝作品の中でもホラー色が一際濃い作品で、ディクソン・カーの伝奇趣味を見事に日本風に移植した作品であると言えよう。一方、物語としては抜群に面白いのに比して、推理部分にはいささかも足りないところがある。実際、本作における金田一は、次々と連続殺人が進行していく中、一向に真相を見抜けぬ無能ぶりを露呈し、犯人に翻弄され続ける。後に読者たちから「金田一は防御率が悪い」という悪口を言われる原因ともなった。

さて、本作の主人公辰弥は、神戸で会社勤めをしているごく普通の青年であったのだが、ある日突然実父の親戚から八つ墓村に来るよう要請される。辰弥は記憶にないような幼い頃は八つ墓村に住んでいたことがあるが、その後は神戸で暮らしてきた典型的な都会人である。そんな辰弥が八つ墓村で目にする田舎の風習は、何もかもが奇異に映るものばかりであったのだ。農村という異世界に紛れ込んだ一人の異邦人。これは主人公の立場であると同時に、現在都会に暮らす多くの読者の立場でもあろう。したがって読者は自然と主人公に感情移入することになり、主人公が段々とその異世界を受け入れていくように、読者もそれを受け入れていくことになるのである。それは一度も田舎で暮らした経験のない人にも、どこか懐かしさを感じさせるような日本人の原体験のようなものである。このような読書体験ができるところに、横溝ミステリを読むもう一つの楽しさがあると言えよう。以上のように本作は、都会人がすんなりと農村という異世界に入っていくように設計されているので、横溝ミステリの入門書として最適である。横溝未体験者の方は、まずは本作から読み始めてみることを強くお勧めしたい。



#### ◎『犬神家の一族』（★913ヨ 角川書店）（1951年＝昭和26年）

**〔内容〕** 真宗財界の大物・犬神佐兵衛が莫大な遺産を残してこの世を去った。佐兵衛にはそれぞれ母親の違う娘が3人いたが、彼女たちにはそれぞれ佐清・佐武・佐智という息子がおり、息子に遺産を継がせることばかり気にしていた。そんな中、佐兵衛の遺言状は弁護士によって金田一耕助の立ち会いのもと公開されるが、その内容は「相続権を示す三つの家宝を恩人の孫娘野々宮珠世に与え、遺産は珠世が佐清・佐武・佐智の3人の中から婿に選んだ者に与える」という相続争いに拍車をかけるようなものであった。

遺産相続のため信州の田舎に復員してきた男は、戦災で顔をひどく負傷し白いゴムの仮面をかぶっていた。彼ははたして本物か、それとも偽物がなりすましたものか。このような興味深い謎で幕を開ける物語は、例のごとく一族内の連続殺人劇に発展していく。古い価値観と血のつなが

りにまつわるどろどろしたドラマは、いつもの横溝ワールドである。

さて本作は、一般読者層からは横溝の代表作だと思われるようだ。本作も確かに横溝らしく面白い作品であるが、歴史に残る名作『獄門島』をさしおいて代表作と見なされるのはおかしくはないだろうか。その理由を探るには横溝作品の映画化について触れなければならない。

1976年(昭和51年)角川書店は、小説と映画をタイアップさせるという画期的な商法を創始したのだが、その第一号となったのが本作であった。市川崑監督で石坂浩二が金田一耕助役を務めた映画版『犬神家の一族』は、原作のもつ絵画的な特徴を余すことなく表現し、興行的にも大成功を収め、多くの一般大衆に強烈な印象を残すこととなる。特に白い仮面をかぶった復員兵の不気味な顔や、池から突き出した死体の二本足のシュールな映像などは、見る者にとってのトラウマになるほどで、横溝作品の印象を決定づけたといつてよい。そしてそれに並行して小説の方も皆ベストセラーとなり、いわゆる「横溝正史ブーム」が現出するのだ。発表されてから20年以上たった小説が、ベストセラーとなるなど空前絶後のことである。このように本作は「横溝正史ブーム」の象徴ともいえる作品となり、そのことから今でも横溝正史といえば「犬神家」を連想する人が多いのである。しかし映画版を見ただけで横溝の魅力をすべて理解したとは決して思わないでいただきたい。横溝の魅力の原点はあくまでも小説にある。映画版しか知らない人も是非原作を読んでいただきたい。さすれば横溝の巧妙な語り口にあつという間に引き込まれ、映画よりも小説の方が何倍も面白いことを、きっと理解していただけることであろう。

### 私の一押し!!

それではこのコーナーでは、《本格ミステリ入門(海外編)》に引き続いて、一般的評価とは関係なく、私が個人的に偏愛する作品を紹介していきたい。

### ◎『白と黒』(★913ヨ 角川書店)(1961年=昭和36年)



**【内容】** 平和そのものに見えた団地内に、突如匿名の怪文書が横行。Ladies and Gentlemenという書き出しで始まるその文書は活字を切り貼りして作られており、住民たちのプライバシーを暴露するものであった。その矢先、団地のダスト・シュートから、真黒なタールにまみれた女の死体が発見された。眼前で起きた恐ろしい殺人に団地の人々の恐怖は頂点に達する…。謎の言葉「白と黒」とは何を意味するのか？ 団地という現代都市生活特有の複雑な人間感情の軋轢と、葛藤から生じる事件に金田一耕助が挑戦する。

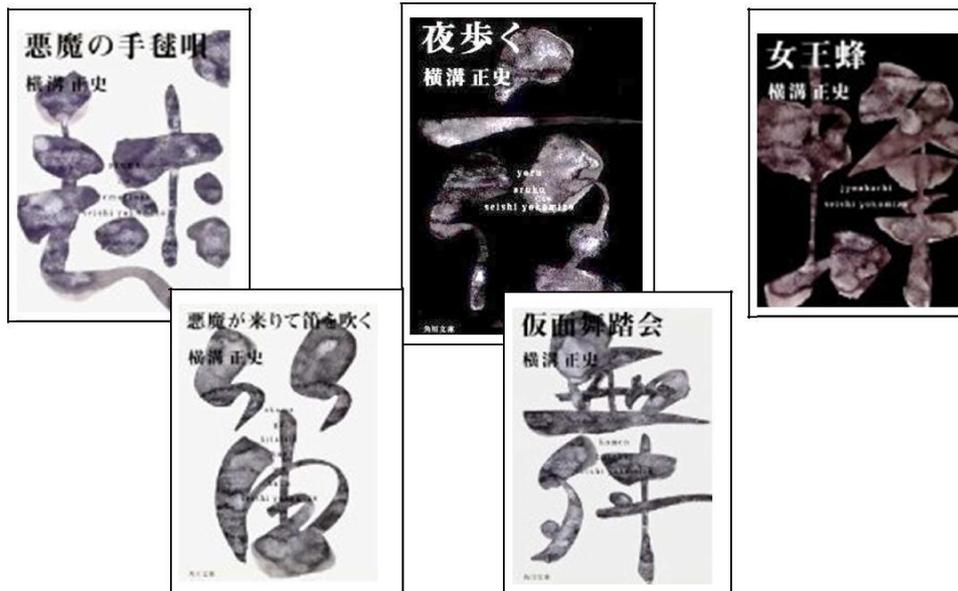
本作は横溝がスランプに陥っていた頃に書かれた作品である。昭和20年代には農村を舞台とした本格ミステリの傑作を続々と世に出してきた横溝であったが、昭和30年代になると壁に突き当たる。それはこの頃、ミステリ界がいわゆる「社会派ブーム」といわれる時代となり、現実根ざしたリアルな小説のみが価値があると見なされ、逆に非現実的な殺人事件や名探偵の活躍を扱った本格ミステリは、幼稚で価値の低いものと見なされてしまったためである。横溝の作品などはまさに後者の典型のようなものであったため、書きづらくなってしまったのだ。特に農村を舞台とすることは、都市に集中しはじめた高度成長期の日本人に現実感を抱かせることを難しくしていたのであろう。そんな中、横溝も何とか時代のニーズに応えるべく、作風を変えようと努力はしている。金田一には、東京に事務所を構えさせ、リアルな都市型犯罪を扱わせようとしたのも、その表れである。しかしこんな話では横溝の長所は殺されてしまう。その結果この時期の作品は駄作ばかりが目立つようになり、この後ついに執筆そのものも中断してしまうのである。本書はそんな中では、珍しく出来の良い作品となっている。

横溝ミステリは、何と言っても農村という固定された社会における複雑な人間関係から生じる謎を描いてこそ輝くのである。その農村を舞台とすることができないのなら、いっそ都市の団地を舞台としたらどうか。そんな思い切った試みが見事に功を奏したのが本作である。一見都市の団地住民は互に関心を持たないバラバラの存在のように見えながら、実は農村と変わらないよ

うな緊密なつながりがあった。少なくとも昭和30年代の団地ではそうであった。それはあくまで「団地」であって、その後互いの関心すらなくしてしまう「マンション」とは似て非なるものなのだ。ならば団地を舞台にしても、農村を舞台にしたのと同じような物語が書けるではないか！本書を読むと、都会を舞台としているのになぜかあの農村ミステリのような香りがするのは、そのようなわけなのである。

それでは最後にこれまで紹介しきれなかった、代表作をもう5作紹介して、本稿第1回を閉じたいと思う。

1. ◎『悪魔の手毬唄』（★913ヨ 角川書店）（1959年＝昭和34年）  
～岡山鬼首村でおこった童謡見立て連続殺人。横溝の代表傑作。
2. ◎『夜歩く』（★913ヨ 角川書店）（1949年＝昭和24年）  
～掟破りの大トリック。一見地味ながらマニアの評価が高い。
3. ◎『女王蜂』（★913ヨ 角川書店）（1952年＝昭和27年）  
～戦前の都会スリラーと戦後の農村本格の両方が味わえる。抜群の面白さ。
4. ◎『悪魔が来りて笛を吹く』（★913ヨ 角川書店）（1953年＝昭和28年）  
～死を呼ぶフルートは悪魔の調べ。舞台は東京だが横溝らしさがあふれる。
5. ◎『仮面舞踏会』（★913ヨ 角川書店）（1974年＝昭和49年）  
～軽井沢を舞台にした、おなじみの血縁ドロドロの話。晩年の秀作。



2013.7.10 更新

## 高校生のための《本格ミステリ入門（日本編）》

執筆 大村 拓

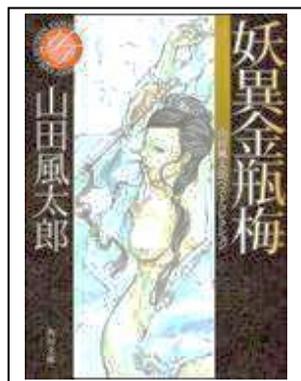
### 第2回 「横溝正史を継ぐ本格派の巨匠たち」 ～高木彬光と鮎川哲也～

前回解説したように、戦後まもなく横溝正史が次々と本格ミステリの力作を発表していったことから、昭和20年代には「探偵小説ブーム」といった状況が生まれた。こうした状況の中で、横溝正史の影響を受けた本格ミステリの有望な書き手たちが数多く輩出してきた。その代表が今回取り上げる高木彬光と鮎川哲也の二人である。彼らはその個性は違えども、いずれもこの時期にデビューした後、長きにわたりわが国の本格ミステリ界をリードしていくことになる巨匠たちである。

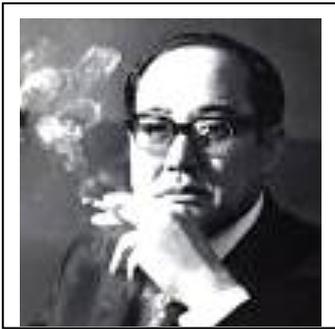
この二人の作品以外にも、この時期の本格物の代表として読んでおくべき作品があるので、その主なものを以下に列挙しておこう。

- 角田喜久雄 ○「高木家の惨劇」(★913ニ3 ◎『日本探偵小説全集3』所収 東京創元社)  
坂口安吾 ◎『不連続殺人事件』(★913サ 角川書店)  
島田一男 ○「錦絵殺人事件」(★913シ ◎『古墳殺人事件』所収 扶桑社)  
山田風太郎 ◎『妖異金瓶梅』(★913ヤ 角川書店)  
◎『十三角関係』(★913ヤ 光文社)  
加田伶太郎(福永武彦) ◎『加田伶太郎全集』(別題『完全犯罪』) (★913カ 扶桑社)

これらの作家たちは、いずれも本格ミステリ以外のジャンルで認知されている人たちであるが、実は本格ミステリでも優れた作品を残しているのである。ちなみに坂口と福永は純文学者として、角田と山田は伝奇時代小説作家として、そして島田は人気テレビドラマの原作者として有名な人である。



## 1. 高木彬光（たかぎ あきみつ 1920-1995）



高木のデビューにまつわる経緯は大変ドラマチックなもので、今では伝説と化している。彼は戦前、飛行機メーカーの技術者だったが、敗戦による倒産で職を失ってしまう。そこで易者に占ってもらったところ、「小説家になると成功する」と言われ、それまで一度も小説など書いたことがなかったにもかかわらず、探偵小説作家になることを決意する。横溝正史の◎『本陣殺人事件』（★913ヨ 角川書店）

（高校生のための《本格ミステリ入門（日本編）》第1回 参照）や角田喜久雄の○『高木家の惨劇』（◎「日本探偵小説全集3」所収

★913ニ3 東京創元社）を読んでみて、これくらいのものなら自分でも書けると考えたからだという。そこで1本の長編ミステリを書き上げて、それをいくつかの出版社に送ってみたところまるで取り合ってもらえないのに業を煮やし、当時日本ミステリ界の中心的存在であった江戸川乱歩にいきなり原稿を送りつけたという。ずぶの素人が文壇の重鎮にいきなり原稿を送りつけるとは、あまりにも無謀な振る舞いであるが、これを読んだ乱歩は、その出来に感心し、雑誌掲載の労をとってくれることになり、無事にデビューを果たせたというのである。高木の猪突猛進ぶりもたいしたことながら、乱歩の懐の深さもたいしたものである。以上の経緯からもわかるように、高木という人は、大変な自信家であり、一度決意すると障害をはねのけて一本気に突き進む情熱家である。この性格が、そのまま高木作品の特徴ともなる。あふれんばかりの自信と情熱の下で生み出される作品は、ひとたびツボにはまると大傑作となる。しかし一方、あまり出来の良くない作品では、自信と情熱とが空回りしてより一層駄作に見えてしまうきらいがある。つまり、当たり外れの激しい作家だと言えよう。プロ野球に例えるなら、打率2割のホームラン王といったところか。したがって高木作品の初心者であろう高校生諸君には、必ず定評のある作品から読んでいただきたい。特に以下に挙げる代表作はいずれも場外ホームラン級の大傑作であるので、安心して読んでもらえると思う。

### ◎『刺青殺人事件』（★913タ 光文社）（1948年＝昭和23年）



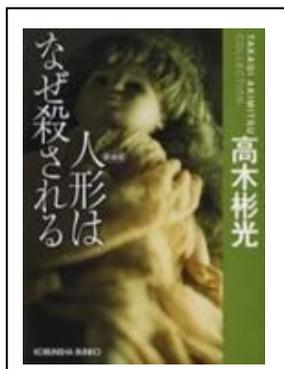
**【内容】** 名人と称される刺青師が3人の子供たちに彫った刺青は、大蛇丸・自雷也・綱手姫というそれぞれ蛇・カエル・ナメクジにちなんだ絵柄であった。しかしこれらは「蛇はカエルを呑み、カエルはナメクジを呑み、ナメクジは蛇を溶かしてしまう」という言い伝えがあるように三すくみの関係になっており、刺青の世界でこの三つを同時に彫ることはタフーとされていたのだ。そしてそのタフーを犯した報いのように、刺青にまつわる連続殺人劇の幕が切って落とされた！

これが伝説のデビュー作である。ずぶの素人の作品ながら、あの乱歩を感心させてしまったのであるから、その出来は折り紙付きである。

「刺青」とは入れ墨のことであり、本作では一貫して入れ墨がテーマとなっている。一般に入れ墨といえば、やくざの世界を連想し、真面目な市民には後ろめたい気分させるものであるが、本作では美女の背中に彫られた華麗な入れ墨が謎の核心となっており、全編にわたって語られる入れ墨に関するうんちくが、一種独特の妖異で隠微な雰囲気醸し出しているのである。高校生諸君にはまず縁の薄いだろう入れ墨の世界をのぞき見ることで、未知の世界を体験してみてもどうだろうか。そしてミステリとしては、完全に密室状態の浴室の中で、美女のバラバラ死体が発見されるのだが、なぜか肝心の入れ墨が彫られた胴体部分だけが、持ち去られているというとびきりの謎が提示されるのである。そしてそのトリックも意外かつ合理的なもので、日本ミステリ史上でも一二を争う出来であるので、大いに期待して読み進めてもらいたい。

さて本作で探偵役を務めるのが、今後高木作品のレギュラー探偵として活躍する<sup>かみづきょうすけ</sup>神津恭介である。彼は東大で法医学を教える学者探偵であるが、頭脳明晰であるばかりでなく、とびきりの美青年でピアノの腕前はプロ並みと、これほど隙のない名探偵は珍しい。彼にかかればどんな難事件でもたちどころに解かれてしまうのである。そのため、完璧すぎるのが唯一の欠点であるといってもよいだろう。そこでこの近寄りがたいほど完璧すぎる名探偵の個性を中和するために、ワトソン役には、凡庸すぎる松下研三を起用している。大食いかつ大酒飲みでお調子者の松下は、何とも愛すべきキャラクターで、神津の推理には何の役にも立たなくとも、物語としてはなくてはならない存在なのである。

◎『人形はなぜ殺される』(★913タ 角川書店) (1955年=昭和30年)



**【内容】**日本アマチュア魔術協会の新作発表会で、小道具の人形の首が盗まれた。そして数日後、成城のとある一軒家で発見された首のない死体の横に転がっていたのは、盗まれた人形の首だった。被害者・京野百合子の義理の妹は事件の真相究明を、探偵作家の松下研三とその友人である名探偵・神津恭介に依頼するのだが、再び人形を用いた殺人予告が届くのだった…。

高木が書き下ろした神津ものの傑作長編である。高木は当たり外れの大きい作家であると前述したが、基本的には書き下ろし作に当たりが多く、雑誌連載作に外れが多い傾向がある。本格ミステリとは、じっくり時間をかけて構想を練り、細部にわたり矛盾がないように注意を払いながら書き進めて初めて良い作品となる。それが締め切りに追われてあわてて書かざるをえない雑誌連載では、行き当たりばつりの設定が多くなり、最後に説明しきれない箇所が多々出てきてしまう。これでは本格ミステリとしてはいただけない作品になってしまうのである。しかし本作は神津ものとしてはデビュー作以来の書き下ろし作であるので、高木の緻密な計算が完璧なまでにいきわたり、気迫あふれる力作に仕上がっているのである。

本作はディクソン・カーの影響が色濃く反映された作品である。カーの特徴である怪奇趣味や不可能興味に満ちており、次々と人形が「殺されて」いく事件が起こるのだ。ギロチンで切断された女の首の代わりに切断された人形の首が置かれていたり、鉄路に横たえられた人形を列車にひかせたり。犯人はいったいなぜこのように意味不明の行動をとるのか。極めて意外かつ合理的な説明が最後に示されることになる。特に人形を列車にひき殺させた本当の目的がわかった時に読者が受ける衝撃のすごさは、ミステリを読み続けている者でも十年に一度めぐりあえるかどうかというほどの奇跡の一瞬なのである。

◎『成吉思汗の秘密』(★913タ 角川書店) (1958年=昭和33年)



**【内容】**兄・頼朝に追われ、あっけなく非業の死を遂げた、源義経。一方、成人し、出世するまでの生い立ちは謎に満ちた大陸の英雄・成吉思汗。病床の神津恭介が、義経=成吉思汗という大胆な仮説を証明するべく、一人二役の大トリックに挑む、歴史推理小説の傑作。

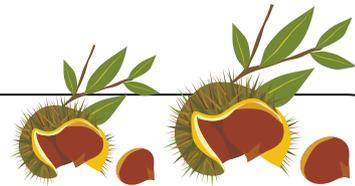
「成吉思汗」はジンギスカンと読む。もちろん羊の焼肉料理のことではない。あのモンゴル帝国の創建者チンギスハンのことであると言えば、真面目に世界史の勉強をしてきた高校生諸君なら知らない人はいないだろう。本作では、奥州平泉で悲運の最期を遂げた源義経が実は生きながらえ、北海道から中国大陸にわたって、ついにはモンゴル族の長となり、史上最大の世界帝国を築き上げたチンギスハンになったことを証明する物語である。

ここで取り上げられる謎は殺人事件のような犯罪に関するものではなく、歴史上の真実に関する

る謎である。しかしこれは歴史学の論文ではないので、あくまでもミステリにおいて名探偵が謎を解くように、証拠に基づいて合理的に推理していくことで歴史の意外な真実を明らかにしていくのである。ちなみにこのようなタイプの作品を、ミステリ界では「**歴史推理（歴史ミステリ）**」と呼ぶ。

本作ではあの名探偵神津恭介が入院中のベッドで、暇にあかせて歴史上の謎を推理していくという形式をとっており、作者はこれを特に「**ベッド・ディテクティブ**」と呼んでいる。これは探偵が現場に行かず、伝聞で得た情報だけで推理する形式を「**アームチェア・ディテクティブ（安楽椅子探偵）**」と呼ぶことに、なぞらえたものである。そしてここで解明されるのは、源義経とチンギスハンが同一人物であったとする説である。これは多くの歴史家が頭から否定しているいわゆる「**トンデモ学説**」であるから、大真面目に受け取る必要はない。しかしこんなとんでもない説であっても、一つひとつ証拠を挙げながら証明されていくのを読んでいると、つつい万が一にも本当であったのではないかとも思えてくるのである。この時に感ずるわくわくするような楽しさは、架空の殺人事件の真相を暴く通常のミステリと共通するものがあり、ここにこそ歴史推理の最大の醍醐味があるのである。

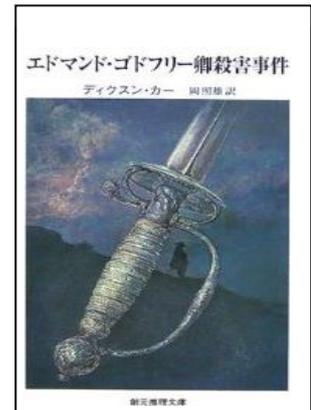
高校生諸君は、ここで証明される説は決してテストの答案に書いてはいけませんが、しかし本作を読むことで歴史に興味をもつ糸口になることは大いにありえる。そのような観点からも社会科の教師である私としては、強くお勧めしたい作品である。



## ◎ミニ特集 歴史推理の系譜

歴史推理の話をしたので、ここではミニ特集として世界の歴史推理の系譜について、もう少し詳しく解説してみよう。これらを参考にして、さらに歴史に興味をもってもらいたい。

世界初の歴史推理は、あのジョン・ディクソン・カーが書いた◎『**エドマンド・ゴドフリー卿殺害事件**』（★933デ 東京創元社）であるとされる。これは実際にあった過去の未解決の犯罪事件を推理し、真相を暴こうとする小説である。ここで取り上げられる殺人事件は、イギリスではそれなりに知られた事件であるらしいが、歴史上の出来事としては特に有名なものではない。また推理をするのは、作中の名探偵ではなく作者自身であり、さながらミステリ作家のカーが得意のミステリにおける推理の手法を使って仮説を示した歴史論文といった内容である。またここで示される仮説も合理的で説得力はあるものの、意外性はなく特に面白いものでもない。

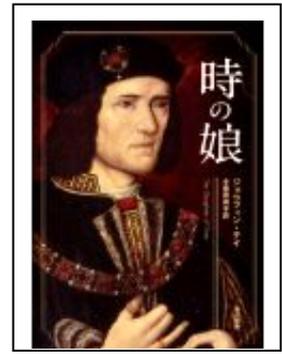


このカーの先行作に影響されて書かれたのがアメリカ作家リリアン・デ・ラ・トアという人が書いた◎『**消えたエリザベス**』である。これもイギリスでは有名な過去の犯罪事件についての推理であるが、1ヶ月間忽然として姿を消した後、突如帰ってきた少女の失踪事件の謎に解決を示している。カーの先行作と大きく違う点は、その真相がミステリ作品のごとくに意外なものである点である。しかし推理するのは作者自身ということに関しては、先行作を踏襲している。

そしてこの2作の影響を受けて、歴史推理の形式を確立させた名作が生まれた。これがイギリス作家ジョセフィン・テイの書いた◎『**時の娘**』（★933テ 早川書房）である。ここで扱う謎は初めて過去の犯罪事件から、歴史上の真実が変わった。本作では悪王として名高いリチャード3世が、実は悪い王ではなかったことを証明する物語である。これにより歴史の定説を覆す真実を証明するのが歴史推理の基本形となったのである。また推理する主体

も、作者自身から作中の名探偵に替わった。ここではテイのシリーズ探偵グラント警部に推理されることにより、ミステリとしての体裁が整ったのである。グラント警部は、長期入院の暇にあかせては、歴史上の推理に没頭することになる。

そしてこのテイの形式をそっくり日本に移植したのが、先述した高木彬光の『成吉思汗の秘密』だったのである。形式こそテイの模倣だが、そのテーマに日本人なら誰でも興味をもたざるをえない義経＝チンギスハン同一人物説を設定したところに、高木の非凡さがあった。そしてこれ以降歴史推理の発展は、歴史好き国民である日本人が担っていくことになるのである。



まず齋藤栄が◎『奥の細道殺人事件』で歴史推理に新趣向を盛り込むことに成功した。それは推理の対象となる謎を歴史上のものだけとせず、それに絡んだ現在の殺人事件の謎までも取り入れたことだ。過去の歴史に関する推理だけでは、どうしても緊張感が希薄となってしまう。そこで推理する主人公側にも何らかの事件に関わらせることで緊張感を高めることができるのである。以後このやり方が、歴史推理のスタンダードとなる。

この後、伊沢元彦と高橋克彦という歴史推理を得意とする作家たちが登場する。伊沢は◎『猿丸幻視行』(★913イ 講談社)でいろは歌に絡む古代史の謎と現在の密室殺人を見事に融合させてみせたし、高橋は◎『写楽殺人事件』◎『北斎殺人事件』◎『広重殺人事件』(3作品とも★913タ 講談社)の浮世絵3部作で、浮世絵師の正体をめぐる興味に主人公の巻き込まれる殺人事件の謎をうまく絡ませることに成功している。

また平成に入ってから、鯨統一郎が◎『邪馬台国はどこですか?』(★913ク 東京創元社)で連作短編歴史推理に新境地を開いた。本来緻密な史料調べを必要とする歴史推理にはある程度の分量が必要とされ、短編はそぐわないと考えられてきた。そこを逆転の発想で、論理の説得性よりも予想外の真相を重視するという切れ味優先の方針をとったことで、短い分量でも書けることを実証した。ここで明かされる邪馬台国の所在地は、歴史家なら絶対に認めるはずもない奇想天外な場所なのだ。

そして現在においても、さすが歴史好き民族の日本人らしく、コンスタントに歴史推理の秀作が生み出され続けている。中でも私の一押しは加治将一である。現代の事件の部分は貧弱だし、主人公のキャラクターも弱いが、歴史の真実の意外性は衝撃的である。特に◎『幕末維新の暗号』(★913カ 祥伝社)は明治天皇の意外な正体を暴いた究極の問題作である。



## 2. 鮎川哲也（あゆかわ てつや 1919-2002）



横溝正史を継ぐ本格派の牽引者として高木彬光と並び称されるのが鮎川哲也である。しかし鮎川の性格は高木とは対照的である。高木は全身に闘志と自信をみなぎらせて書き上げる文豪タイプだが、鮎川は万事控え目に我が道を行く職人タイプである。売れる売れないに左右されず、ひたすら書きたいものを書く。これが鮎川の姿勢だが、その書きたいものが常にぶれることなく本格ものであったところが最大の特徴である。後世の人が彼のことを「本格派の驍将（※勇ましい推進者といった意味）」と称えるのもこの姿勢による。彼の作風はじっくりと謎解きに専念していく地味

なものだが、トリックや犯人特定のロジックなど本格ものの肝となる部分では一切手抜きがないので、本格ものの好きの読者からは、絶大な信頼を勝ち得ている。またいささかピントのずれたとぼけたユーモア感覚も持ち味の一つであり、派手さはない分、一度慣れると何とも心地よく感じられるようになり、未永く読み続けていきたくなってしまふのである。

ミステリのタイプとしては、大きく分けるとF.W.クロフツ・タイプのアリバイ崩しものと、エラリー・クイーン・タイプのロジック重視ものに大別される。（《本格ミステリ入門（海外編）》第3、5回 参照）このうち特筆すべきなのは、何と言ってもクイーン・タイプの作品であろう。本格ミステリといえばトリックの考案に尽きるというのが常識であった当時の日本ミステリ界において、クイーンのようなロジック（※犯人特定にいたる論理）の大切さを理解していたことは特筆に値する。現在でこそ本格派の作家の中には、クイーンの影響を受けた人は数多く存在するが、昭和20～30年代頃の日本においては、ほとんど皆無であった。鮎川は時代を30年先取りしていたといってもよいだろう。

それでは以下に、彼の代表作について見ていこう。

### ◎『黒いトランク』（★913ア 東京創元社）（1956年＝昭和31年）

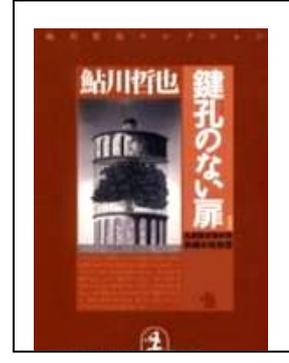
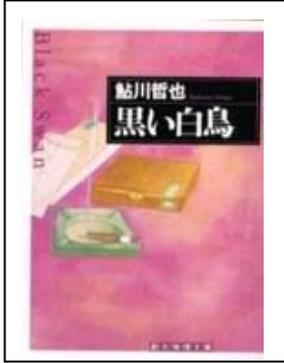


**【内容】** 東京・汐留駅に届いた大型トランクの中から、男の腐乱死体が転がり落ちた。容疑は当然、九州からトランクを発送した近松千鶴夫にかかったが、彼もまた瀬戸内海上に漂う死体として、岡山県で発見されたのだった。かつて思いを寄せた人からの依頼で捜査に着手した鬼貫の前に、アリバイの鉄の壁が立ち塞がる…。鮎川の実質上のデビュー作。

本作はクロフツ・タイプの作品の代表作である。クロフツといえば、リアリズム・ミステリを創始し、地道な捜査によるアリバイ崩しを特徴とするイギリス本格派の巨匠であるが、本作はそのクロフツに真っ向から挑んだ力作である。クロフツの処女作兼代表作である『樽』は、英仏海峡を行き来する船荷の樽の中に死体を詰め、複雑に移動させることで作り上げられた犯人の巧妙なアリバイ・トリックを打破していく物語であるが、本作ではその容れ物を樽からトランクに、移動手段も船から鉄道に換えた上で、同様の趣向に挑戦している。しかしだからといってこれを『樽』の単なる模倣と見なしてはいけない。そのトリックの複雑さ、推理の筋道の確実さは本家『樽』をはるかにしのぐ出来である。ここでは読者は時刻表をはじめとする様々なデータを手がかりとして、トランクの移動に関わる複雑なパズルを試行錯誤しながら解きほぐしていく推理体験ができるのである。その知的快感は他では得難いものがある。まさにアリバイ崩しものの最高傑作と評してよいだろう。

そしてここで探偵役を務めるのが鬼貫警部である。天才的ひらめきではなく、靴底をすり減らしながら地道な捜査を進める努力型探偵であり、当然そのモデルはクロフツのシリーズ探偵であ

るフレンチ警部である。だが鬼貫警部の性格は極めて地味である。わかっているのは「鬼貫」という名字だけで、ファーストネームすら明らかになっていないのである。その意味では組織人としての魅力にあふれるフレンチ警部よりも格段に影が薄い。したがって本作は探偵のキャラクターに惚れ込んで読み進めるタイプのミステリではないと言えるのだが、かといって鬼貫にまるで魅力がないかというところではないから不思議である。地道な捜査のさなか、嬉しそうに好物のココアに舌鼓を打つ姿などはなんとも愛らしく、つきあえばつきあうほど離れがたい魅力が増してくるのである。鬼貫はこの後、ほとんどのクロフツ・タイプの作品に起用されるシリーズ探偵となっていく。もしこのタイプのミステリの魅力を理解していただけたのなら、◎『黒い白鳥』（★913ア 東京創元社）、◎『死のある風景』（★913ア 東京創元社）、◎『鍵孔のない扉』（★913ア 光文社）あたりもあわせて読むと良いだろう。



◎『りら荘事件』（★913ア 東京創元社）（1958年＝昭和33年）



**【内容】** 残り少ない暑中休暇を過ごすべく、秩父の「りら荘」に集まった日本芸術大学の学生たち。一癖も二癖もある個性派揃いである上に各様の愛憎が渦巻き、どことなく波瀾含みの空気が流れていた。一夜明けて、りら荘を訪れた刑事がある男の死を告げる。屍体の傍らにはスペードのA。対岸の火事と思えたのも束の間、火の粉はりら荘の滞在客に飛び火し、カードの数字が大きくなるにつれ犠牲者は増えていく。進退窮まった当局の要請に応じた星影龍三の幕引きやいかに。

本作はクイーン・タイプの作品の代表作である。これは小説の形式を借りた純然たるパズルであるので、決して小説としての面白さを期待してはならない。山荘に集まった学生たちが次々と殺されていく物語であるが、この手の話にお馴染みのサスペンスやドロドロした愛憎ドラマなどは何もない。まるで記号のように薄っぺらな登場人物たちが一人一人消えていくだけなのである。したがってその物語展開は極めて単調で盛り上がり欠ける。つまりこれだけを見るとまったくつまらない話なのである。しかし本作の主眼はそんなところではなく、物語の中にトリックや犯人を特定するための推理の材料をいかに巧妙に潜ませるかのみに特化して書かれているのである。そしてその手がかりは実は堂々と読者の眼前に示されているにもかかわらず、作者の巧みな誤誘導（ミスディレクション）により普通の読者ならまるで違った意味に受け取らされてしまうことだろう。作者の企みに引っかからないためには、一行一行注意を払いながら手がかりを拾い上げ、論理的推理に基づいて真相を導き出すしかないのだが、多くの読者は作者の企みの前に敗北するしかないだろう。このようにおよそ一部のマニアにしか受けそうにないような作品を、手間暇かけて作り上げる鮎川という作家はなんとも奇特な人で、当時の日本では希有の存在であったのだ。

なお本作で探偵役を務める星影龍三は、クイーン・タイプの作品限定で起用される名探偵であるが、彼の人物造形も他の登場人物と同様、実に薄っぺらで、さしたる魅力もないのが残念なところである。

もしこの手のタイプの面白さが理解できたなら、純然たる犯人当て短編である○「達也が嗤う」（◎『下りはつかり』所収 ★913ア 東京創元社）や○「薔薇荘殺人事件」（◎『五つの時計』所収 ★913ア 東京創元社）もお勧めしたい。これらは当時のミステリ作家仲間たちの会合で朗読するために書かれた作品なのだか、プロの作家たちを相手にしていかに真犯人を当てさせないようにするのか、技巧の限りが尽くされている。



### 私の一押し!!

例によってこのコーナーでは、一般的評価とは関係なく、私が個人的に偏愛する作品を紹介していきたい。

### 鮎川哲也

○「クイーンの色紙」（◎『クイーンの色紙』所収 ★913ヨ 東京創元社）

（1987年＝昭和62年）



**【内容】** 推理作家の色紙を集めるのが趣味の翻訳家が自宅でパーティーを開いたところ、最も自慢としていたエラリー・クイーンの色紙が消えてしまうという事件が発生。常識的に考えれば出席者の誰かが色紙を盗んだと考えたが、誰にも色紙を持ち出す機会は無かった。色紙はどこに消えてしまったのか。事件の話の聞いただけで「三番館のバーテンダー」が人間の盲点をついた真相を解き明かす。

本編は鮎川が創造した鬼貫、星影に次ぐ3人目の名探偵「三番館のバーテンダー」が活躍する一短編である。「三番館のバーテンダー」とは氏名不詳の一介のバーテンダーに過ぎないが、彼は実は大変な名探偵なのである。事件捜査に行き詰った私立探偵「わたし」が、バー「三番館」を訪ね、カクテルを飲みながら事件の概要を語り始めると、黙って話を聞いていただけのバーテンダーが、予想外の視点から名推理を披露し、真相を言い当てるといのがお決まりの展開で、いわゆる安楽椅子探偵（アームチェア・ディテクティブ）ものの典型である。

さて本編の最大の特徴は、そのトリックに作者の人柄が強く反映している点にある。私は一度晩年の著者にお会いしたことがあるが、その人柄は評判どおり、謙虚で温厚なものであった。そして本編のトリックは、まさにそういった性格の人でしか生み出せないものなのだ。クイーンの色紙はどこに消えたのか。この謎が解き明かされた時、著者の謙虚な人柄が読者の胸を打つことであろう。書き手の人柄を反映したストーリーや人物描写なら前例はいくらでもあろうが、人柄が反映したトリックなど、そうそうお目に書かれるものではない。

### 社会派全盛時代の二人

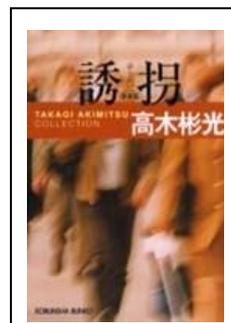
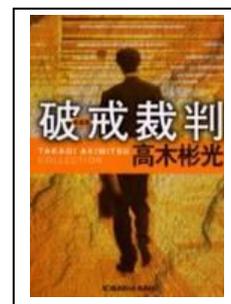
それでは最後に、高木彬光、鮎川哲也の両名が社会派全盛時代をどのように乗り切ったかを解説しておきたい。横溝正史の回でも述べたように、昭和30年代のわが国のミステリ界は社会派

全盛時代に突入する。（その詳しい解説は次回、本シリーズ第3回で行う予定。）これは現実に根ざしたリアルな小説のみが価値あるものと見なされ、逆に非現実的な殺人事件や名探偵の活躍を扱ったような本格ミステリは、幼稚で価値の低いものと見なされてしまった時代のことである。高木の神津恭介ものや鮎川の星影龍三ものなどはその典型で、批判の矢面に立たされることとなった。こんな時流の中、横溝は一時筆を折ってしまったわけだが、高木・鮎川は、まだデビューしていくらもたっていない現役バリバリの作家で、なんとしてもここで消えてしまうわけにはいかなかった。そこで彼らはそれぞれのやり方でこの苦難の時代を乗り切っていくのである。

高木はこの時期作風を一新して社会派風の作品を書くようになる。時代に合わない神津ものを書くのはやめ、弁護士や検事を探偵役とする社会派タッチの作品にシフトしたのだ。しかし何事にもエネルギーに全力投球で臨む高木らしく、このジャンルでも大きな成果を挙げてしまうのだ。たとえばこのタイプの代表作である◎『**白昼の死角**』（★913タ 祥伝社）は、現実にあった手形詐欺事件を題材としたもので、膨大な資料を読み込んで書き上げた社会派ミステリの力作である。さらに◎『**破戒裁判**』（★913タ 光文社）と◎『**誘拐**』（★913タ 光文社）では社会派と本格派の融合に成功する。

『破戒裁判』は部落差別を題材とし、『誘拐』は現実に起こった幼児誘拐事件を題材としている点で、十分に社会的メッセージをもっているのだが、同時に読者をミスリードし真相の意外性を演出するという本格ミステリ固有の遊び心も有しているのだ。これらはある意味著者の最高傑作であると言ってもよいだろう。

一方、鮎川の方はどうだったのか。彼の星影ものに代表されるクイーン・タイプの作品は、当時本格派が批判される時の決まり文句「人間が描けていない」がそのままあてはまってしまうような作品であったため、しばらくこのタイプのものは書けなくなってしまった。しかし鮎川にはもう一つ鬼貫ものがあつた。こちらはリアリズムを標榜するクロフツ・タイプのミステリなので、社会派との相性は良かったのだ。そこでこの時期の鮎川はもっぱら鬼貫ものの執筆に専念していくことになる。実のところ鮎川の鬼貫ものは謎解き以外には関心をもたない本格ミステリ以外の何物でもないのだが、リアリズムの衣をまとっていたために、批判の目から逃れることができたのだ。さらに元来売れる売れないよりも、自分が書きたいものを書くという職人氣質の作家であったため、およそ流行とは程遠いこれらの作品を書き続けることができたとも言えよう。



【注】 1.◎『 』で表したものは、当時あるいは現在でも出版されている本の書名です。

○「 」は、小説の題名です。

2.★で表したものは、習志野高校図書館が所有している本です。NDCも表記します。

3.小説の内容については、書体を違えています。

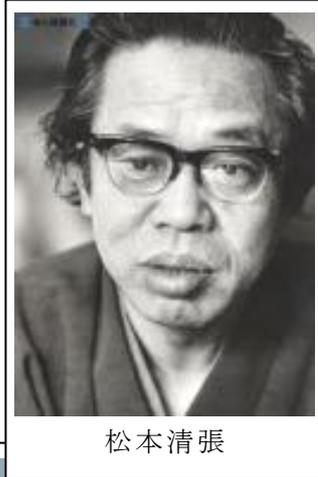
2013.10.3 更新

## 高校生のための《本格ミステリ入門（日本編）》

執筆 大村 拓

### 第3回 「社会派全盛時代の本格推理」

～<sup>せいちょう</sup>松本清張・<sup>つづき</sup>笹沢左保・土屋隆夫・都筑道夫・中井英夫～



1955年になると日本は、劇的な経済発展を実現した高度経済成長期に突入した。そして、男性が「会社人間」とか「モーレツ社員」などとよばれたこの時代の雰囲気に応ずるように、「社会派ミステリ」の全盛時代がやってきた。

#### 社会派ブームの到来

それは1958年（昭和33年）に松本清張が発表した◎『点と線』と◎『眼の壁』（ともに★913マ 新潮社）から始まった。この2冊はたちまち大ベストセラーとなり、その後の日本ミステリの方向性を決定づけてしまったのだ。それは、いわゆる「社会派」というジャンルを確立させ、「社会派でなければミステリにあらず」といえるような社会派の優越性を当然とみなす方向性であった。そこで、そんな目に見えない空気のような圧力が加わった結果、従来のような本格ミステリは文壇の片隅に追いやられていくことになる。

それでは社会派とはいったいどのようなミステリを指すのか。以下に解説してみよう。まず狭義の社会派とは、何らかの社会問題の告発をテーマにしたものと定義できよう。たとえば、政治腐敗や企業犯罪といった社会的な巨悪を、ミステリの手法で暴いていくといったタイプの作品のことである。このタイプのミステリは、迷いなく社会派にジャンル分けすることができる。しか

し、その先駆となった清張の2冊の中にはそれほど社会問題の提起は含まれていないことから、実際の社会派の定義は、もう少し緩やかなくくりで行われているようだ。そのポイントを挙げてみると、以下の3点に集約されよう。その3点とは、①舞台の現実性、②捜査の現実性、③動機の重視である。

### ①舞台の現実性

まず事件の舞台となる場所は、現実暮らしている人々にとって普通に身近なものでなければならない。たとえば、仕事場である大都市のオフィス街であるとか、接待に使う夜の歓楽街であるとか。そんなことは当たり前と思われるかもしれないが、それまでの日本ミステリの舞台といえば、欧米ミステリの世界をそのまま移植してきたようなおおよそ日本には不似合いな洋館などが通例であった。そして、そこに集まった仕事もしないで長期間滞在していられるような暇人たちの間で、事件が起こるのが常であった。これは、当時の人々にとって現実にはまったくありえない設定で、とても感情移入できるようなものではなかっただろう。それを革新し、現実と地続きの世界を描くのが社会派の第一の条件である。

### ②捜査の現実性

探偵役は、警察官や検察官といった職業捜査官でなければならない。百歩譲って弁護士か新聞記者あたりまでが許容範囲だ。従来のミステリで主役を張っていたような私立探偵などは、現実の世界で犯罪捜査に加わることなどありえず、非現実の極みであるから、起用してはならない。ただし、たまたま巻き込まれてしまった一般人が探偵役を務めることは許されるが、同じ人が何度も事件に巻き込まれることなど現実にはありえないことなので、その登板は一度に限られる。また、その捜査方法も、聞き込みを中心とした現実的なものでなければならない。名探偵の神のごとき推理などは、絵空事なので、許されるべきではない。それが社会派の第二の条件である。

### ③動機の重視

解かれるべき謎の中心は、人間性の問題、すなわち普通の人間が普通に生活していく上で起こる問題が犯人の動機でなければならない。たとえば貧困や差別に端を発する犯罪、組織の保身のため個人が犠牲となる犯罪など、その動機には現実に生きる人々が共感できるような社会的な背景がなければならない。ここにこそ作家が最も心血を注がなければならないのである。これが社会派の第三の条件である。それに対し従来のミステリで謎解きの中心となっていたのは、犯人のトリックや、意外な犯人の正体などで、動機の問題は軽視されていた。せいぜい復讐や遺産相続といったお決まりのパターンに終始していればよかったのだ。

以上のように社会派は、ミステリのあるべき姿を従来のものから一変させてしまったのである。しかしよく考えてみれば、①②はクロフツが創始した作風であり、③もバークリーがまったく同様の主張をしていたことは、本稿の海外編（クロフツ・バークリーともに《本格ミステリ入門（海外編）》第5回参照）で詳述したとおりである。この点から見ると社会派ブームとは、クロフツもバークリーも本格派の作家であったのだから、元来本格ミステリとも両立しうるものであったことも理解できよう。

## 社会派ブームの背景

それではこのような社会派ブームは、どうして起こったのであろうか。その社会的背景をもう少し細かく分析してみよう。社会派ブームの始まった1958年とは日本が戦後の混乱期を脱し、未曾有の高度経済成長の時代に入った時である。高度成長のシンボルであった東京タワーの完成が同年であり、まさに映画『ALWAYS 三丁目の夕日』で描かれたような時代であったのだ。この時代の男たちは働けば働くほど、給料は上がり、国家も発展するということを疑わなかった。そんな彼らにとっての現実とは、どうしても仕事の世界ということになり、共感できる小説もやはり同じ世界観をもっていた松本清張の描くような世界、すなわち社会派ミステリの世界だったのである。一方、従来のミステリの描いてきたような日本のどこにもないような作りごとめいた世



界はあまりにも空々しいとして敬遠された。また、横溝正史の描いた封建的な日本の農村社会もある意味リアルな存在ではあったのだが、集団就職などで大量に人口が都心に流入してきていた当時の世相の中では、徐々に大衆の共感を得られなくなっていた。ところでそれはあくまで男性にとっての現実でしかないのではないかと、疑問が浮かぶ人もいるのではないだろうか。確かに共稼ぎは少数であり、専業主婦が主流であった当時の女性にとっての現実とは、まさに家庭のことであり、社会派が描いたような「会社」の世界ではなかったはずだ。にもかかわらずミステリ界で男の世界だけがもてはやされたのは、それだけミステリが男性の読み物であった証しといえよう。今でこそミステリ読者の中心は女性といわれるが、当時はあくまでもミステリは男の娯楽だったのである。

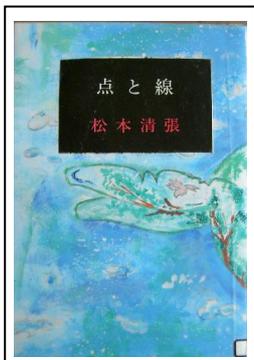
## 本格派の衰退

このような社会派ブームの中で、松本清張のような作風のみが価値をもち、従来のような本格ミステリは、「見せ物小屋」などと揶揄され、その価値を認められなくなってしまった。そんな中、横溝正史は執筆を一時中断し、高木彬光は社会派との融合を試み、鮎川哲也は「現実派」の鬼貫警部ものに力点を移していったことは、本シリーズ《高校生のための本格ミステリ入門（日本編）》の第1回・第2回で見てきたとおりである。まさに本格ミステリにとっては強い向かい風が吹いていた時代といってよいが、だからといって本格ミステリが絶滅したわけではなかった。社会派の形式を踏みながら、ちゃんと本格ミステリも書き継がれていたのである。確かに典型的な名探偵の存在は稀少となり、現実離れした謎の設定なども見られなくなった。しかしそんな中でも、論理で謎を解いていくいわゆる本格ミステリの秀作も数多く書かれてきたことは忘れてはならない。ただし、本格ミステリが本来もっていた子供じみた遊び心などは発揮しにくくなっていったことは間違いない。そこで、読者の常識を覆すような斬新な発想に基づく独創的な本格ミステリが生まれるようになるには、オイルショックによって高度経済成長を止められた1970年台なかばあたりまで待つしかなかった。なにせひたすら仕事に没頭していた当時のサラリーマンたちにとって、そのような仕事に関係のないものを楽しむ余裕などなかったのであろうから。

それでは以下に、「社会派ミステリ」全盛時代といわれつつも、この時代に書かれた本格ミステリの代表作を5作紹介してみよう。

### 1. 松本清張（まつもと せいちょう 1909-1992）

◎『点と線』（★913マ 新潮社）（1958年＝昭和33年）



**【内容】九州博多付近の海岸で発生した、一見完璧に近い動機を持つ心中事件、実はその裏には恐るべき企みがひそんでいた。汚職事件にからんだ複雑な背景と、殺害時刻に容疑者は北海道にいたという鉄壁のアリバイの前に立ちすくむ捜査陣…。しかし刑事たちの地道な調査で謎は一步一步解けていく。列車時刻表を駆使したリアリスティックな状況設定で、推理小説界に「社会派」の新風を吹きこみ、空前の推理小説ブームを呼んだ秀作。**

社会派ブームの到来を告げた本作は、名実ともに社会派ミステリの代表作であると同時に本格ミステリの秀作でもある。（ちなみに本作と同時にベストセラーとなった『眼の壁』の方は、典型的なスリラーであり、まったく本格物ではないので、本稿では取り扱わない。）この後、社会派の旗手とよばれるようになる清張だが、決して本格ミステリを否定していたわけではなかったのである。本作は、地元警察のベテラン刑事鳥飼と警視庁の三原警部補の二人が、互いに協力し合いながら丹念な捜査と地道な推理によって、犯人の構築した鉄壁のアリバイを徐々に崩していくという典型的なクロフツ・タイプの作品である。

特に時刻表を用いた謎解きは、鉄道ミステリ好きにはたまらなく魅力的だろう。とりわけアリバイ作りに利用された「4分間の見通し」のアイデアは今でも語り草となっている。この「4分間の見通し」とは、始終列車が入線してくる東京駅のホームに一日のうちたった4分間だけ3つ先のホームまで見通せる瞬間があり、この4分間にたまたま目撃されたことから、容疑者に鉄壁のアリバイができるというアイデアである。しかしこの魅力的なアイデアも、よく考えてみるとまったく必然性がないことや、これとは別のメインとなるアリバイ・トリックもあまりに安易なものであることなどから、正直なところ本作は本格ミステリとしては難点が多いと言わざるをえない。そもそも、多作家である清張の作品は、トリックの創案には意外と熱心なわりには、その必然性や実効性に疑問のあることが多く、本格ミステリとしてはあまり高く評価することができない。あくまでも清張という作家は、社会派の要素を第一として評価すべき作家なのであろう。

それでも◎『時間の習俗』（★913 マ 新潮社）と◎『砂の器』（★913 マ 1,2 新潮社）の2作は、本格ミステリとしてだけ見ると、本作よりも優れている。特に『時間の習俗』は鮎川哲也が書いたのかと見紛うばかりの、トリックを重視した純本格物である。また『砂の器』は映画版が社会派映画の傑作としてあまりに有名であるが、原作は映画版とは随分雰囲気違った真っ当な本格物である。清張の本格ミステリを楽しみたい人は、まずマスト・アイテム（＝必読の書）である『点と線』を読んでみても、これら2作を味わってみるとよいだろう。



## 2. 笹沢左保（ささざわ さほ 1930-2002）

◎『招かれざる客』（★913 サ 2 笹沢左保コレクション 2 光文社）

（1960年＝昭和35年）



**【内容】** 事件は、商産省組合の秘密闘争計画を筒抜けにしたスパイを発見した事が発端だった。スパイと目された組合員、そして彼の内縁の妻に誤認された女性が殺され、二つの事件の容疑者は事故で死亡し、一件落ち着いたかに思われた。しかし、ある週刊誌の記事から事件に疑問を感じた倉田警部補が、鉄壁のアリバイと暗号、そして密室の謎に挑む。笹沢左保のデビュー作にして代表作となる傑作本格推理小説。

笹沢左保（本作刊行時の筆名は笹沢佐保）は、生涯に350冊もの著作を残した超人気作家である。その作風は本格ミステリのみならず、サスペンス、官能小説、時代小説と多岐にわたり、そのいずれにおいても一流の仕事をした。特に時代小説の代表作である「木枯し紋次郎」シリーズは、テレビドラマでも人気を博し、主人公木枯し紋次郎の決めゼリ「あっしには関わりのねえことござんす。」は、当時の流行語ともなった。

その笹沢のデビュー作が本作であり、惜しくも江戸川乱歩賞の受賞は逃したが、最終候補に残ったのを認められ刊行された。これは労働組合問題を背景とした会社人間たちの熾烈な世界をリアルな筆致で描いていく典型的な社会派ミステリだが、同時に凝った構成の下、惜しげもなく繰り出されるトリックや周到な伏線などは、本格ミステリ以外の何ものでもない。まさに社会派と本格派の融合に成功した傑作といえよう。作者自身もその点を強く意識しており、当時自らの

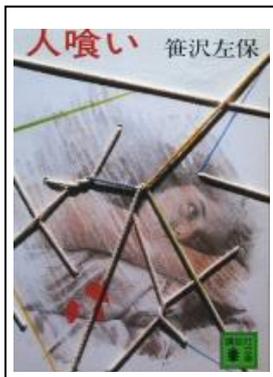


TV「木枯し紋次郎」

作風を「新本格」と称していた。これは、かつての本格物のような非現実な世界ではなく、あくまでもリアルな世界観の中で、なおかつ謎解きの面白さに主眼をおいた作品を書くぞという、作者の意志表明であった。（しかしこの「新本格」という名称はあまり定着せず、現在普通に「新本格」といえば、1987年の綾辻行人デビュー以降の、現実にとらわれずに本格ミステリ本来の遊び心に回帰しようとする作風を指すのが一般的である。ちなみに後者の「新本格」については、本シリーズ《高校生のための本格ミステリ入門（日本編）》の第5回で解説する予定である。）

初期の笹沢は本作を皮切りに、次々と本格ミステリの傑作を発表していった。この頃の代表作である◎『霧に溶ける』（★913 サ 3 笹沢左保コレクション 3 光文社）、◎『人喰い』（日本推理作家協会賞受賞）（★913 マ 講談社）、◎『空白の起点』（★913 マ 講談社）、◎『暗い傾斜』（別題『暗鬼の旅路』）（★913 マ 角川書店）などは、『招かれざる客』と何ら差がないレベルの作品なので、本作が気に入った人は、そちらにも手を出してみるとよいだろう。中でも『霧に溶ける』は、ミス・コンテストの候補者が次々と殺されていくというサスペンフルな設定の中、惜しげもなく多くのトリックを注ぎ込んだ本格物の力作である。『人喰い』もまた次々と繰り出される数々のトリックで読者を圧倒する。一方、『空白の起点』と『暗い傾斜』はトリックの量より質で勝負するタイプの作品だが、両作ともメイン・トリックとして人間心理を巧みに利用したアリバイ・トリックが創案されており、どちらも一読の価値がある。

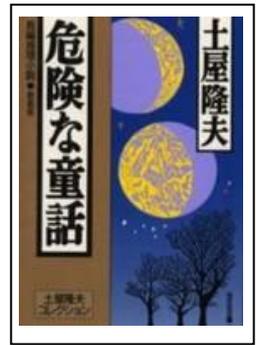
最後に笹沢作品の欠点を指摘しておくが、社会派特有の難点として、時代の風俗を取り入れたがために時代の変化とともにその価値観が古びて見える点が挙げられる。笹沢作品においても、特に女性の恋愛観などは、現在の常識から見るとあまりにも古風すぎて、現在の読者が素直に感情移入することは難しいだろう。当時の読者に感情移入させようとリアルな時代の空気を取り込んだ社会派が、時代の変化とともに逆に感情移入しづらくなっていくとは、何とも皮肉な現象だ。したがってこのような社会派風の作品を読むときは、あたかも時代小説を読むような、少し距離をおいた感覚で読むとちょうどよいだろう。



### 3. 土屋隆夫（つちや たかお 1917-2011）

◎『危険な童話』（★913ツ 光文社）（1961年＝昭和36年）

**【内容】** 仮釈放され刑務所から出てきた男は、ピアノ教師木崎江津子の家で殺された。発見者である江津子が容疑者として逮捕された。被害者の体に残った痕跡から、兇器は片刃のナイフと推定されたが、その物証がどうしても発見できない。焦る捜査陣をあざ笑うかのように、一枚の葉書が届けられた。容疑者の不起訴が決定した中、あくまでも容疑者の有罪を信じる木曾刑事の執念の捜査は果たして実を結ぶのか。論理とロマンチズムが鮮やかに結合した推理小説。



『推理小説が文学たり得るか否かについては、多くの議論がある。あるものは、謎の提出とその論理的解決のみが、この小説の宿命であると称し、あるものは、それを児童戯に類するものとして、謎を生み出す人間心理の必然性をこそ、まず考えるべきであると主張する。トリックか。人間か。わが子よ。私は不遜にも、文学精神と謎の面白さの全き合一を求めて歩み出したのだ。』

冒頭の引用は、土屋隆夫が社会派と本格派の融合に作家生命を懸けて挑まんとする熱い思いを表明した言葉である。そして彼こそがこの難業を完全に成功させた作家だったといえるだろう。土屋は典型的な寡作家で、この点において多作家の松本清張や笹沢左保とは対照的である。そのため一作一作手間暇をかけて作られるその作品は、どれもが一流の工芸家による手工芸品のような精緻な輝きを放っている。

さて本作は、土屋のこのような姿勢が最初に結実した記念碑的作品である。ここには読者を驚倒させるような大胆な仕掛けがあるわけではなく、またその分量も少なめで超大作といえるような重厚さもない。それでいてメインとなる凶器消失トリックを始めとするいくつものトリックが実に念入りにこしらえられており、手作りの魅力にあふれているのである。実際、土屋は作中で使うトリックはすべて実証済みであるというのだから、ここまで手間暇かけてくれば文句のつけようがなかろう。また土屋の特長の一つである文学味もここにはよく表れている。『危険な童話』というタイトルにもあるように、本作には作者が自作した童話が挿入されているのだが、この童話が事件の真相と密接な関係をもっているのである。そしてその童話はそこはかとなく文学的香気を漂わせ、作品全体に格調を与えているのだ。

土屋は寡作家だけに当たり外れの少ない作家だが、特に初期の作品に傑作が集中している。本作以外では◎『影の告発』（日本推理作家協会賞受賞）、◎『赤の組曲』、◎『針の誘い』、◎『盲目の鴉』（以上、4冊とも★913ツ 光文社）あたりは非常にレベルの高い作品なので、是非こちらも読んでもらいたい。ちなみに、これらはいずれも千草泰輔検事が探偵役を務めている。『影の告発』『赤の組曲』は、最初はいまいだった事件の背景が徐々に明らかになっていく過程が大変魅力的な作品だし、『針の誘い』はサスペンスと意外性に満ちた誘拐ものの傑作である。また『盲目の鴉』は土屋の文学的資質が最も色濃く反映した作品である。



#### 4. 都筑道夫（つづき みちお 1929-2003）

○『血みどろ砂絵』（『ちみどろ砂絵』）

（『なめくじ長屋捕物さわぎ 血みどろ砂絵 くらやみ砂絵』所収

★913 ツズ1 桃源社）（1969年＝昭和44年）

**【内容】江戸は神田の橋本町、ものもらいや大道芸人ばかりが住んでいるおかしい長屋に、センセーと呼ばれる推理の特技をもった砂絵描きがいた。当時珍しい合理的精神の持ち主で、犯罪事件が起こると、わずかな礼金にあずかろうと、見事な推理で謎を解く。センセーと長屋の連中が、よってたかって解き明かした奇妙な事件の数々…。**

**四季折々の江戸の風物を背景に、ユーモラスな本格推理を融合させた、異色の傑作捕物帖。**



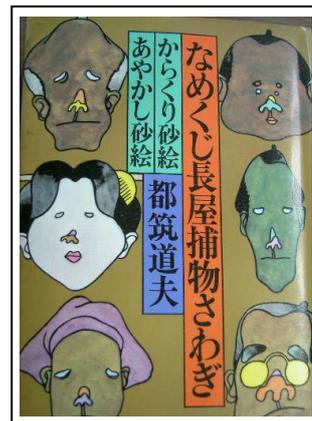
都筑道夫は、笹沢左保や土屋隆夫が目指したのとはまったく違った方向性で、本格ミステリの現代化を図った作家である。彼は、海外ミステリの紹介を主とした雑誌の編集長を務めたほどの人物であったので、海外ミステリの最先端事情にも詳しく、その観点から本格ミステリのあるべき姿を革新しようとしたのである。その意味において、日本限定のムーブメントであった社会派との融合にこだわることはなかった。そんな都筑の目指した方向性とは、トリックよりもロジックを重視するというスタイルで、彼はそれを「モダン・ディテクティブ・ストーリー」（ディテクティブ・ストーリーとは探偵小説の意）と名づけた。ロジック重視の方向性は、アメリカでエラリー・クイーン（《本格ミステリ入門（海外編）》第3回 参照）が確立したスタイルであるが、都筑もそれにならってあくまでも論理による推理の道筋の面白さで、本格ミステリを再生しようとしたのである。しかし残念なことに、彼の方向性は間違いなく本格ミステリの正しい未来を指し示していたにもかかわらず、実作においてはそれを証明するような傑作を残すことはできなかった。彼のこの方面での代表作である◎『七十五羽の鳥』（★913 ツ 光文社）などを見て、トリックの切れ味が乏しい上に、ロジックにもさほどの切れは見られず、どっちつかずの作品に終わってしまっている。逆に彼の代表作といわれる◎『猫の舌に釘をうて』（★913 ツ 光文社）や◎『三重露出』（★913 ツ 光文社）などは、凝りに凝りまくったスタイルで書かれた、トリックもロジックも関係ない個性あふれる作品で、もはや分類不能の怪作・奇作といつてよい。

その中で、都筑の代表作としてふさわしい作品を挙げるとすると、やはり『血みどろ砂絵』を第1作とする「なめくじ長屋捕物さわぎ」シリーズであろう。その名のとおり、これは江戸時代を舞台とする時代物であり、貧乏長屋に住むインテリで本名不詳の通称“砂絵描きのセンセー”が名推理を披露して一見怪異としか見えない謎を解く、典型的な本格短編集である。時代を科学的精神に乏しい江戸時代に設定したことが逆に功を奏し、現代物でやれば馬鹿馬鹿しく見えるような妖怪の仕業としか思えないような怪異な謎の設定が、不自然なく扱われているのである。本作にも、渡し舟の上から忽然と消え失せた男の謎や、タヌキの仕業としか思えない見立て殺人など、本格ミステリの直球勝負ばかりが目白押しで実に頼もしい。つまり都筑が軽視したトリックがかえって面白いのである。

本シリーズはこの後書き継がれていき全11冊にまとめられているが、やはり初期のものほど出来がよい。『血みどろ砂



絵』が気に入ってもらえたなら、続けて第2作の○『くらやみ砂絵』  
 (『なめくじ長屋捕物さわぎ 血みどろ砂絵くらやみ砂絵』所収 ★  
 913 ツズ 1 桃源社)、第3作の○『からくり砂絵』、第4作の○『あ  
 やかし砂絵』(第3作・第4作は、『なめくじ長屋捕物さわぎ から  
 くり砂絵あやかし砂絵』所収 ★913 ツズ 2 桃源社)と読み進めてい  
 くよいよであろう。読み進めていくことで、センセーに率いられて活躍  
 する長屋の個性豊かな面々にも愛着がわき、読む楽しさも倍増すること  
 であろう。



## 5. 中井英夫 (なかい ひでお 1922-1993)

◎『虚無への供物』 (★913 ナ 1,2 講談社) (1962年=昭和37年)



**[内容]** 昭和29年の洞爺丸沈没事故で両親を失った蒼司・紅司兄弟、従弟の監司らのいる氷沼家に、さらなる不幸が襲う。密室状態の風呂場で紅司が死んだのだ。そして叔父の櫻二郎もガスで絶命。殺人なのか事故なのか。駆け出し歌手・奈々村久生らの推理合戦が始まった。その推理合戦は「五色不動」「植物学」「仏教典」「薔薇」「アイヌ」「過去の転覆事故」「シャンソン」などの蘊蓄を傾けながら演じられる絢爛たるものであった。そして最後に読者を直撃する衝撃的な真相とは？ ミステリ史上に燦然と輝く究極の問題作。

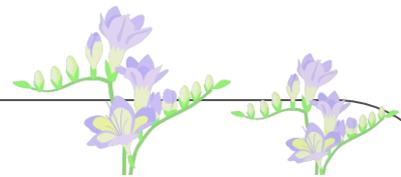
本作は幻想小説作家である中井英夫が、生涯でただ一冊だけ残したミステリ作品である。中井は本作の前半部分だけを江戸川乱歩賞に応募したのであるが、最終選考まで残ったのに惜しくも受賞には至らなかった。そこで後半部分を書き足して刊行したところ、やがてミステリ・マニアから熱狂的に支持されるようになり、現在ではミステリ史上に残る名作と認められるまでになった。現に文藝春秋が行った過去2度にわたるミステリのオールタイム・ベスト投票では、2度とも横溝正史の『獄門島』に次ぐ第2位にランクされたほどである。(ランキングは『東西ミステリーベスト100』1986年版 ★901ブ 文藝春秋、『東西ミステリーベスト100』2013年版 ★901ブ 文藝春秋 で見ることができる。55頁参照。)

さて本作の内容であるが、ある呪われた一族内に起こった連続殺人をめぐって、素人探偵たちが喜々として推理を披露しあうという物語である。その謎も本格ミステリ定番の密室殺人をはじめ魅力的なものばかりだし、様々な蘊蓄を傾けながら展開される推理合戦も、それ自体が本格ミステリ本来の楽しさに満ちあふれている。つまり一見するとこれはただの典型的な本格ミステリであって、社会派の洗礼はかけらも受けていないように見えるのだ。そのため社会派全盛時代のこの時代において、どうしてこのような旧タイプの作品が世に出ることを許されたのか、疑問すら浮かぶほどである。しかしこの長大な作品を最後まで読むと、これはただの本格ミステリという枠に収まるようなありきたりのものではなく、本格ミステリの在り方そのものに対する批判すらその中に含み込んだ、ジャンルを超越した作品であることに気づかされることになる。つまり本格派か社会派かといった論争が低次元のものに見えてしまうほど壮大な構造を有した作品なのである。ちなみに、読む側と読まれる側の境界すらなくなってしまったこのようなタイプのミステリを、メタ・ミステリ(またはアンチ・ミステリ)とよぶ。本作は、作中に提示された謎をただきれいに解けばいいというだけの作品ではないので、ミステリに合理的



な解決だけを求めて読む保守的な読者には、本作のように論理を超越した構造は理解不能なものとなり、評価しようのないものとなるだろう。この点で、この『虚無への供物』が、戦前に書かれた不条理ミステリの代表作小栗虫太郎著◎『黒死館殺人事件』（★913 オ 社会思想社、★913 ニ 6 ◎『日本探偵小説全集 6 小栗虫太郎集』所収 東京創元社）、夢野久作著◎『ドグラ・マグラ』（★913 ユ 1,2 角川書店、★913 ニ 4 ◎『日本探偵小説全集 4 夢野久作集』所収 東京創元社）とともに「三大奇書」とよばれるゆえんなのである。

以上のような点から、本書はミステリ初心者がいきなり手を出すと火傷するような作品といえるかもしれない。しかしこのように不条理なほどに壮大なテーマを完全には理解できなくとも、謎と推理の楽しさは充分味わえるので、意外と読みづらいということはない。高校生諸君も怖いもの見たさで勇気をもって読んでみると、案外面白く感じられるかもしれない。



### ◎ミニ特集 江戸川乱歩賞

本文の中で、笹沢左保や中井英夫が江戸川乱歩賞の最終選考に残ったことを書いた。ついでに言うと、土屋隆夫のデビュー作も乱歩賞の候補作である。そこでここではミニ特集として、江戸川乱歩賞について説明してみよう。

この賞は 1955 年、江戸川乱歩の寄付金をもとに、わが国のミステリ界の功労者を顕彰するために創設されたものである。第 3 回からは、毎年公募に応じてきた新人作家の長編作品の最優秀作に賞が授与されるようになり、やがて日本ミステリ界における最高の権威をもった登竜門として認知されるまでに成長していくのである。実際その受賞者の顔ぶれの中には、西村京太郎（第 11 回）、斎藤栄（第 12 回）、森村誠一（第 15 回）、東野圭吾（第 31 回）ら、ベストセラー作家たちが多数含まれている。そのため、ミステリ作家としてのデビューを夢見る作家志望者たちにとってのあこがれの的となっているのだ。ただし近年では、横溝正史賞、鮎川哲也賞、メフィスト賞などデビューへのステップは何通りも存在するため、乱歩賞のステータスは相対的に低下しているのが実態ではあるが。

さてそんな乱歩賞のはえある最初（第 3 回＝1957 年）の受賞者は仁木悦子である。受賞作◎『猫は知っていた』（★913 ニ ポプラ社）はクリスティーを思わせるオーソドックスな本格物で、その健康的で癖のない作風は、多くの一般読者から歓迎された。くしくもこの年は、松本清張による社会派ブーム勃興の前年にあたり、社会派の匂いすらない作品が受賞した例外的なケースとなった。現に翌年からは、少なくとも社会派的なスタイルをとった作品ばかりが受賞していくこととなる。そんな中で、本格派として注目しておくべき作家を何人か紹介しておこう。

まず第 7 回（1962 年）に、◎『枯草の根』（★913 チ 2 集英社）で受賞した陳舜臣は、その名のとおり台湾国籍をもつ人（ただし日本生まれ）で、受賞作は中国人探偵陶展文が活躍するオーソドックスで風格あふれる本格物であった。以降、辛亥革命が絡んだ◎『炎に絵を』（★913 チ 1 集英社）や唐時代の中国を舞台



とした表題作を含む短編集◎『方壺園』(★913 千 中央公論新社)など、いずれも中国にちなんだ本格物という独自のスタイルを確立していった。

次いで第13回(1967年)、海渡英祐が受賞した◎『伯林——八八八年』(★913 カ 講談社)は、ベルリン留学時代の森鷗外が密室殺人の謎を解くという、斬新な趣向をとっている。高校生諸君にとっては、国語の授業でお馴染みの『舞姫』の世界が、そのまま作品の舞台となるのであるから、興味を感じずにはいられないだろう。この海渡英祐という人は、あの高木彬光の助手をしていたことがあることから推察されるように、本格ミステリを扱う腕は一流のものがあつ、特に受賞後第1作である◎『影の座標』(★913 カ 講談社)は、当時としては珍しくエラリー・クイーンばりのロジックを駆使した本格物の知られざる逸品である。

最後にもう一人、第27回(1981年)の受賞者長井彬を取り上げてみたい。その受賞作◎『原子炉の蟹』(★913 ナ 講談社)は、その名のとおり原子力発電所内での殺人事件を扱った本格物である。しかしこの作品の真価は何といつても原発の抱えている問題を余すことなく取り上げている点で、放射能漏れの問題から、放射性廃棄物の処理問題、さらには下請け作業員の被曝問題まで、その危険性について警鐘を鳴らしている硬派な社会派ミステリなのである。現在の福島原発事故の深刻な現状を鑑みるに、あの時国民はこの作品の指摘する問題点になぜもっと真剣に耳を傾けなかったのかと、悔やまれてならない。



### 私の一押し!!

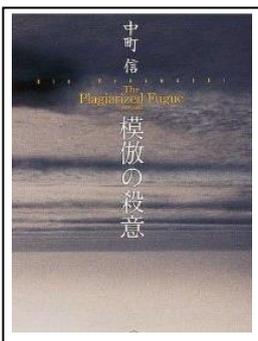
例によってこのコーナーでは、一般的評価とは関係なく、私が個人的に偏愛する作品を紹介していきたい。

中町信 (なかまち しん 1935-2009)

◎『模倣の殺意』(★913 ナ 東京創元社) (1973年=昭和48年)

(別題『新人賞殺人事件』『新入文学賞殺人事件』)

**[内容]** 七夕の夜、坂井正夫が服毒してアパート4階の自室から転落死した。推理新人賞を獲得して1年、末だに受賞第一作が没になったまなことから、創作上の行きづまりが原因の自殺と推定された。しかし、同人誌仲間でフリーライターの津久見伸助と坂井の恋人で編集者の中田秋子だけは、疑惑を抱いて調べはじめたところ、坂井と名乗る男から秋子へ電話が入り、やがてまた、七夕の夜が巡って来た。著者が絶対の自信を持って読者に仕掛ける超絶のトリック。



中町信は、社会派全盛時代にもかかわらず、ぶれることなく本格ミステリのみを書き続けた奇作家である。そんな彼の得意とした技は「叙述トリック」であった。叙述トリックとは、犯人が捜査側に仕掛ける通常のトリックに対して、作者が読者に対し直接仕掛けるトリックのことを指す。つまり作者がその記述を通して読者を引っかけるタイプのトリックのことである。そもそも本格ミステリの大前提として、犯人はいくらでも嘘をついても許されるが、作者は絶対に読者に対して嘘をついてはならないというルールがある。これは作者の記述が信頼できなければ、そもそもミステリなど成立しえないわけだから、絶対必須の条件だと言ってよい。そしてそのルールの下での叙述トリックであるから、ここでは作者は決して嘘をつかないで、しかも読者を間違った方向に錯覚させるという高等テクニックを駆使しなければならないことになる。それだけ難易度が高いトリックなのだ。近年では、特にこの叙述トリックの研究が尽くされた結果、様々なアイデアで読者をだましてくれるようになったが、昭和の時代には結構珍しいことであった。

中町はそんな中、叙述トリックを得意とした珍しい作家なのだが、本作も作者の第1作にして、十八番の叙述トリックが見事に決まった傑作なのである。実のところこのタイプの作品は、読者のお楽しみのためには叙述トリックがあること自体伏せておくほうがよいのだが、これを抜きにしては、中町の魅力を十分に伝えられないので、ここは思い切って明かさせていただく。それでもミステリ初心者の皆さんでは、決して作者の仕掛けは見抜けないと思う。本書はそれだけ巧みに仕掛けられており、読者は結末で必ずや驚愕することだろう。優れた叙述トリックとはどのようなものか、本書で是非体験してもらいたい。

ところで、本コーナーは、一般的評価とは関係なく私個人の趣味で作品を紹介する場なのだが、実は本書は現在ベストセラーとなっているということなので、「一般的評価」も十分高いということになってしまい、本当はこのコーナーにはふさわしくないかもしれない。しかし、本作の評価が高まったのは実のところごく最近のことで、2009年に作者が亡くなった後のことなのだ。生存時は、中町といえば、一部のコアなマニアだけが熱烈に支持する売れない作家であった。本書などはまさに「知られざる名作」の典型だったわけだが、それが近年突如売れるようになったとは、さぞや作者も墓の中でびっくりしていることだろう。そこで、死後に評価が高まった大画家ゴッホになぞらえて、中町信のことを「ミステリ界のゴッホ」と名づけてみようではないか。

【注】 1.◎『 』で表したものは、当時あるいは現在でも出版されている本の書名です。

○「 」は、小説の題名です。

2.★で表したものは、習志野高校図書館が所有している本です。NDCも表記します。

3.小説の内容については、書体を違えています。

2014.1.20 更新